

## 文化学園服飾博物館 だより

第18号 ● 2005.4.1

### ● 新収資料の紹介 ●



「唐崎の夜雨」



「瀬田の夕照」

#### 単衣 (近江八景模様)

江戸時代後期

日本の風景美を代表する近江八景を表した武家女性の夏の着物。薄い浅葱の地色を琵琶湖に見立て、背面に「三井の晩鐘」「粟津の晴嵐」「唐崎の夜雨」、前面に「石山の秋月」「比良の暮雪」「矢橋の帰帆」「堅田の落雁」「瀬田の夕照」を配している。風景が小袖の文様とされるようになったのは、江戸時代中期以降であるが、中でも近江八景はしばしば取り上げられた。文様は糊防染によって白く染め残し、紫、萌葱、金糸などの刺繍と型鹿の子(型染めによって鹿の子絞りを表す技法)を加えている。品格があり、涼しさを感じさせる一領である。



#### 海水着

右：1900年代～1910年頃 イギリス  
左：1930年頃 フランスか

海水着は19世紀後半から一般の人々が海辺へ避暑に出かけることが習慣になり、多く着用されるようになる。初めは体にフィットしたものではなく、今の街着に近いたちであった。右のキュロット・ドレス型の海水着は水泳教室の教師が着用していたものである。左は海水着にフレア・パンツとベルトがセットされている。セーラー・カラーは英米の水兵の制服から取り入れられ、当時のスポーツ服によく見られた。



#### 靴 ヤン・ヤンセン作

左：“Love” 1989年  
右：“Tania” 1995年

ヤン・ヤンセン(1941～)は1963年にアムステルダムにスタジオを設立してから常に斬新で独創的なデザインを発表し、国際的に高い評価を得ているオランダの靴デザイナーである。ヤンセンが発表する靴にはどれも名称がつけられている。

「ドレスを彩る帽子、靴、バッグ…」

4月1日～5月29日

着用者の個性を表現するうえで欠かすことの出来ないアクセサリ類に焦点を当て、19～20世紀の帽子、靴、バッグ、パラソル、扇、手袋、ショール、ブローチ、ネックレス、ボタン、バックルなど約600点を紹介しました。また、展示中に特別講師として服装学院を訪れたオランダの著名な靴デザイナー、ヤン・ヤンセン氏から自身のデザインの新靴3点が博物館に寄贈され、これらを特別出品として展示に加えました。

「友禅 伝統と創造 熊谷好博子の世界」

6月18日～8月6日

熊谷好博子は昭和30年代から50年代にかけて東京で活躍した友禅の作家です。本展は長女のみづほ氏から寄贈された50点余りの着物やパネルと、みづほ氏の所蔵品で構成しました。伝統を尊重しながらも現代的な感覚にあふれ、また多様な技法によって制作された作品は、染色による表現の幅広さを示すものであり、多くの来館者に感銘を与えました。

「西洋服飾版画の系譜」

9月7日～28日

文化学園図書館との共催で、図書館が収集した服飾に関する貴重な欧文献の中から16～20世紀初期の西洋服飾版画を展示し、これらをとおして、板目木版、銅版、鋼鉄版、石版、ポショワール、写真製版への変遷を紹介しました。ほとんどが初公開の貴重な文献で、服飾の関係ををはじめとする各方面に注目された展示となりました。展示に合わせて「ヴェネチアとルネッサンス・ファッション」と題し、文化女子大学を卒業後、イタリア服飾史研究者として活躍している加藤なおみ氏による講演会を開催しました。

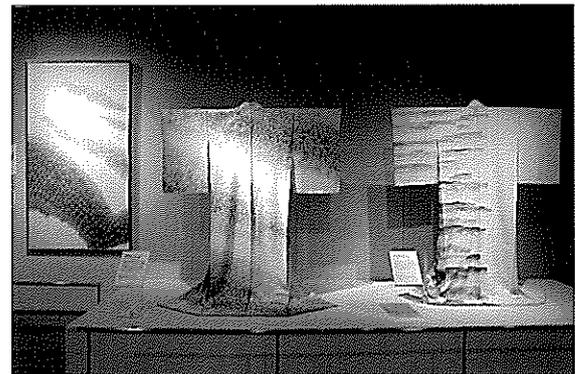
「花の表現 服飾・染織にみる花文様」

10月15日～12月10日

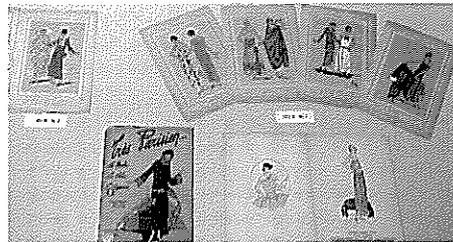
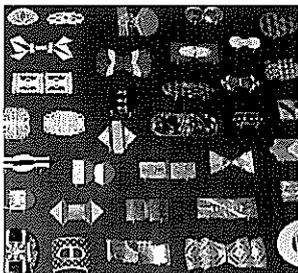
本展では、古くから世界各地で私たちの身のまわりを彩ってきた花文様を取り上げました。具象的で季節感が豊かな日本の花、唐草やペイズリーなど様式化された花、西アジアを中心とした抽象的な花など、日本、アジア、ヨーロッパの各地域の多様な花の表現を改めて感じ取っていただくことができました。また、本展ではパリ・コレクションで活躍する丸山敬太氏（文化服装学院卒）の花をモチーフにしたドレスも特別出品されました。

「イスラム世界の服飾文化」'05年1月6日～3月11日

本展では、西アジア、中央アジアから東南アジア、アフリカにいたる広範なイスラム世界の伝統服飾を取り上げ、世界各地のヴェール、護符としての役割も果たす銀製の装身具、信仰を反映させた文様の意味などに焦点をあてながら、多様な衣服文化を紹介しました。会期中、ソルマズ・ウナイドゥン在日トルコ共和国特命全権大使には「イスラム女性の過去・現在・未来—トルコを中心として」と題し、現代の社会生活と信仰との関わりを女性の視点からお話いただき、イスラムにたいする興味と親しみを覚えるよい機会となりました。



「友禅 伝統と創造 熊谷好博子の世界」展より



「花の表現 服飾・染織にみる花文様」展より



左上：「ドレスを彩る帽子、靴、バッグ…」展より ベルトのバックル  
 右上：「西洋服飾版画の系譜」展より  
 左下：ソルマズ・ウナイドゥン在日トルコ共和国特命全権大使の講演  
 右下：「イスラム世界の服飾文化」展より



【ドレスのかたち 立体⇔平面 1770~1960】

4月20日~6月7日

私たちが日常着用している洋服は身頃、衿、袖などのいくつかのパーツが組み合わされ、立体的なフォルムを作り出しています。展示では18世紀のロココ時代から20世紀のオートクチュールまでの約200年にわたるドレスの歴史の中で、各時代のドレスが流行のシルエットを作り出すために、どのような形のパーツを組み合わせて作られているかに焦点をあてます。

いくつかのドレスからは実物大の型紙(パターン)を作製し、立体のままでは見えない部分を探ります。



製図器 1902年頃 アメリカ



イブニング・ドレス  
1957年 ディオール フランス

【館蔵名品展 日本服飾の美】

10月26日~12月10日

館蔵の日本関係資料の名品を展示します。展示の構成は宮廷衣装、武家服飾、小袖、能装束とし、公家装束の伝統を受け継いだ近代の宮廷衣装、大名家の陣羽織や火事装束、豪商三井家旧蔵の小袖、彦根藩主井伊家旧蔵の能装束などを紹介します。公家、武家、町家それぞれの美意識から生み出された服飾を通して日本の服飾、染織の特質を探ります。



打掛 江戸時代後期



火事具足 江戸時代後期

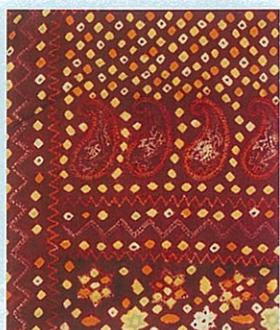
【世界の絞り】

6月29日~10月6日

染織技法の一つである絞りを取り上げます。絞りは模様染めの最も素朴な技法とされ、糸で括る方法、型で圧縮する方法等、古くから世界各地で行われてきました。世界で類を見ない程多様な発展をとげた日本の絞りをはじめ、東南アジア、インド、アフリカ、アンデスの絞りなどを展示し、各地の多彩な絞りの美を紹介します。



着物 明治~大正時代



肩掛(部分) 20世紀初め インドネシア

【一枚の布 -まとう・つつむ-】

'06年1月12日~3月14日

一枚の方形布をまとう形式の衣服は、インドのサリーやインドネシアのサロンに代表され、アジアやアフリカなどの各地で見られます。展示ではこれらの衣服に注目し、どのように体に沿わせて巻き付けるか、それぞれの着装方法と共に、布そのものの染織的な美しさにも触れます。また、衣服の他に韓国のポジャギなど、さまざまな物を自在に包む一枚の布も紹介します。



サリー 19世紀 インド



ポジャギ 20世紀 韓国

\*上記の予定は都合により変更されることがあります。